

J-Pop および日本の舞台・映像芸術の若手エンタテイナーの活動に見るクロスオーバーの諸相

増山賢治 愛知県立芸術大学音楽学部教授(音楽学)

はじめに

本稿は J-Pop および日本の舞台・映像芸術（ミュージカル・演劇、映画・テレビ）において、ジャンルを越えて活動を展開している数組の若手エンタテイナーの姿をとらえ、そこからそれぞれのジャンルの新しい関係性を模索するクロスオーバーの諸現象を読み取る試みである。かつて J-Pop のミュージシャンの多くはテレビに出演しないことを基本方針として、一部を除いてはテレビドラマや映画に出演することはほとんどなく、ましてやミュージカルをふくめ演劇の舞台に立つなど想像し難いことであり、そしてそれと同様に映画・演劇俳優が CD 制作、ライブ出演といった音楽活動を展開することなど考えられないというのが、ゆるやかではあるが人々の共通認識であったように思われる。しかし、音楽、舞台、映像といった芸術諸ジャンルのコラボレーションが定着した今日では、過去と正反対に多くの有能な若手エンタテイナーがジャンルの枠を越えた様々な興味深い活動を展開しており、今回はそれらの中から近年デビューしたエンタテイナーで、J-Pop および舞台・映像芸術の世界に一石を投じていると考えられる人々に着目し、彼らのデビューおよびその後の活動から J-Pop と舞台・映像芸術ジャンル間の関係性の諸相を以下の手順で探るものである。

まず演劇・映画界から J-Pop 界にメジャーデビューした二組、+Plus とコア男¹。という俳優を中心に結成された音楽ユニットを取り上げ、彼らの活動に見られる舞台・映像と J-Pop とのクロスオーバーの状況を具体的に述べる。次に J-Pop の世界から舞台・映像芸術ジャンルに進出したミュージシャンとしてソロシンガーの松下優也を取り上げ、そこに見られる映画や舞台(特にミュージカル) とのクロスオーバーの状況を浮き彫りにして、併せて彼らが活動を展開するための重要な場として機能していると思われる演劇・ミュージカル界の新局面を一瞥しながら、最後に舞台・コンサート（ライブ）の映像化という上

演（上映）方式に起きている新しい変化を示す。

1 演劇界から J-pop への参入

(1) 若手俳優とミュージシャンで結成された音楽ユニット～ +Plus

+Plus のプロフィールについては公式 HP と彼らのインディーズ時代の CD 《Answer》に書かれてメンバー紹介文を参考にまとめると次のようになる。

「2008年12月1日結成。ロックをベースにしつつも、ヒップホップレゲエ、R&B などあらゆるジャンルのエッセンスを取り入れ、昇華させる新世代4ピースバンド」というように方向性が明確に掲げられている。メジャーデビューは「2009年8月19日シングル《日向に咲く夢》でポニーキャニオンより」となっているが、それ以前に映画「イケメンバンク THE MOVIE」²の主題歌・挿入歌として使用された〈Answer〉〈You〉の2曲を収録した前述のCDを出しており（2009年3月11日）、恐らくそれは彼らの所属事務所である映画配給会社ジョリーロジャー（HP → <http://jollyroger.jp/>）が敷いた音楽業界メジャーデビューへの伏線と推測される。メンバーは次のとおりである（+Plusの公式HPの記載順に準じる）。

* MOTO：1985年8月12日生まれ。神奈川県出身。ボーカル & ギター。バークリー音楽院プロフェッショナル科卒業。「イケメンバンク THE MOVIE」主題歌アーティスト募集の中、約500人の応募の後に選ばれた新人。

* 小谷嘉一：1982年3月25日生まれ。東京都出身。ボーカル & Bass。1999年ジュノン・スーパーボーイコンテストでベスト6に入ったのをきっかけに芸能界入り。「BOYS LOVE 劇場版」（2007）主演・蒼井海広役。「荒くれ KNIGHT 激闘編・襲名編」（2007）木原篤役。「ミュージカルテニスの王子様」（2005、2006）河村隆役。

* 永井朋弥：1986年11月24日出生。愛知県出身。ボーカル。映画「スーパーカブ」主人公の親友・直人役（2008年1月公開）、映画「男女逆転 吉原遊郭」（2008年10月公開）、映画「GOTH」（原作／乙一）（2008年12月公開）

* 岩元 健：1980年生まれ。東京都出身。ボーカル。「+Plus」結成にあたり、選ばれた新人。

次に音楽、映像・舞台の活動状況だが、シングル CD の収録曲だけを見ても

彼らに関わった映画、テレビ、舞台の宣伝手法の一環としてテレビ番組や映画作品との「タイアップ」を実行していることが分かり、それについて付録のDVD映像およびInstrumentalいわゆるカラオケを省略して表記すると次のようになる。

1st シングル《日向に咲く夢》(2009年8月19日発売)

1. 〈日向に咲く夢〉 TBS系列テレビ「女神サーチ」6・7月度エンディングテーマ
2. 〈Game Over〉 映画「学校裏サイト」主題歌
3. 〈ずっとずっと…〉 TBS系列ドラマ「帝王」挿入歌、舞台「恋人は透明人間」主題歌、DVD「スーパーモタード」主題歌

2nd シングル《雪道》(2009年12月16日発売)

1. 〈雪道〉 TBS系列テレビ「ざっくりマンデー」12・1月度エンディングテーマ
2. 〈FLY〉 映画「草食系男子」「肉食系女子」主題歌
3. 〈笑顔の君に〉 映画「華鬼」三部作主題歌

3rd シングル《声》(2010年3月17日発売)

1. 〈声〉 TBS系ドラマ「新撰組 PEACE MAKER」エンディングテーマ
2. 〈桜舞う風の中〉 TBS系テレビ「クイズ ALL FOR ONE」2010年2・3月度エンディングテーマ
3. 〈ファイティングポーズ〉 映画「喧嘩番長 劇場版～全国制覇」主題歌

4th シングル《キャンバス》(2010年8月4日発売)

1. 〈キャンバス〉

5th シングル《Fiesta/ エール》(2011年1月19日発売)

1. 〈Fiesta〉 テレビ東京系列アニメ「FAIRY TAIL」1月から新オープニングテーマ曲
2. 〈エール〉 文化放送2010-2011ロードレース実況中継イメージソング
3. 〈Birth〉 映画「×ゲーム」主題歌

4th シングル《キャンバス》以外すべてタイアップをしているが、ここに提示されている映画作品「草食系男子」「肉食系女子」、「喧嘩番長 劇場版～全国制覇」、「×ゲーム」、「華鬼」三部作、「学校裏サイト」は上演前からテレビなどで華々しくプロモーションが展開され、いわゆる大手の映画館で上演される作品とは些か性格を異にしており、また「帝王」³「新撰組 PEACE MAKER」などのテレビドラマもいわゆるゴールデンの時間帯（デジタル大辞泉では19:00-21:00、ウィキペディアでは19:00-22:00）で放映されたものではない。それは自社配給の映画作品や自社が何らかの形で関わるテレビ番組をタイアップの対象とする方が得策と考えた結果と思われるが、実際はタイアップと

いう手法自体がもはやそれほど大きな意味を持たなくなったと考えた方が良いかも知れない。なぜなら、近年その在り方が従来とは異なってきていると考えられるからで、それに関しては、「テレビ・タイアップが威力を失った」（烏賀 2005: 193-200）に「そもそも、テレビはインターネットの登場でその影響力を低下させつつあるのだ。（中略）・・・つまりインターネットやパソコンに接する時間が長くなればテレビに接する時間は短くなる。逆もまた真なり。ふたつは両立しないのだ。」とあり、さらに、「情報感度の高い層ほど、テレビの視聴時間を優先的に削り、インターネットやパソコンに費やしていることが次第にあきらかになってきた。」、そして『電通総研のレポート』（2002年度-2）を引用して「流行を先導するような、情報にもっとも敏感な層がテレビから離れていることは、販売促進ツールとしてのテレビ・タイアップの弱体化を決定的にした。」という見解が示されている。

筆者は基本的に上記の見解に賛同するが、さらに付け加えるとするならば、テレビとインターネットが両立する可能性もしくは別の形での相互作用、例えば「インターネットでテレビのゴールデン時間帯以外の興味深い深夜番組を発見」、「映画・演劇俳優のテレビ出演をインターネットでチェックしてその番組を見る」といったようにテレビへの新しい接し方が出現する可能性もあるのではないかと考えている。そうであれば、インターネットによってテレビに対する接し方、見方が変わってくるといった方がより適切なように思われる。一言でテレビと言っても地上波、BS、ケーブルなど多様化し、録画機能が普及した今日、顕著なのは地上波のゴールデン時間帯への崇拜傾向の衰退であり、「ゴールデン時間帯にテレビを見ていれば、何となく流行に乗っているという意識」が人々の間で次第に希薄化しているように感じられる。換言すれば、より新しいものを求めたければテレビの深夜放映枠、映画ならテレビに出演する機会の少ない俳優が主演するような非メジャー作品という人々の、捉え方や志向が1つの確固とした流れとして存在するという分析に基づいて、今日タイアップが実行されているとは考えられないだろうか？ いずれにしても、タイアップは1つの有効な宣伝手法ではあるが、以前ほどの神通力を発揮することはもはやできないというのが大方の認識となった以上、例えば、テレビドラマ「新撰組 PEACE MAKER」のように放映以前に舞台化され、その後舞台版、テレビ版ともにDVD化することで、以前のタイアップのような速効性はあるが一時的なもので、放映終了後は急速に忘れ去られる事態を回避し、むしろ漸次的な相乗

効果の増幅を期待しているように思われる。さらに言えば、視聴率やオリコンの数字だけを基にサブカルチャー、カウンターカルチャーといった文化概念上の区分けが今後は実質的意味をもたなくなることも考えられるだろう。

次に、+Plus の作詞・作曲について 1st アルバム『キャンバス』⁴（2010 年 4 月 21 日発売）の収録曲のデータを整理すると次のようになり、メンバーは演奏だけでなく創作にも深く関与していることがわかる。

「声 / FLY / Sun-Day!! / 桜舞う風の中 / 雪道 / ファイティングポーズ / 着火 MIND / Pure / ナミダ / 愛 = 感謝 / キャンバス」

→ 「Words & Music by +Plus、Arranged by +Plus, Redwood Humberg Jr.」

「日向に咲く夢 / Game over / ずっとずっと…」

→ 「Words by +Plus、Music & Arranged by +Plus, Redwood Humberg Jr.」

「笑顔の君に」

→ 「Words & Music by +Plus、Arranged by +Plus, 小高光太郎」

そして、ライブ活動は公式 HP に詳細なライブヒストリーが掲載されていて、中にはキャンペーン用のフリーライブもあり、連日相当な勢いで活動していることがわかる。映画舞台出演については公式 HP やメンバーのブログに書かれているので本稿では省略し、舞台出演の内、最近の例として舞台「メンズ校」（和泉かねよし原作の同名のコミックを舞台化したもので 2010 年に上演）に本来の出演者 2 人（俳優の小谷嘉一と永井朋弥）に加えて、一部の公演日に学園祭バンドのメンバーという設定の下、4 人全員で出演を果たし、その DVD が製作されていることを付記するに留める。

それから、音楽活動と演劇の関係については、メンバーの一人、小谷嘉一がミュージックエンタテインメントサイトバークスの +Plus コラム Vo.53 (<http://www.barks.jp/news/?id=1000066150>) 「芝居と音楽の融合」というタイトルで次のように書いている。「さて、最近の小谷は八犬伝という舞台の稽古の真っ最中です！！普段の音楽活動と平行して役者もやっている小谷ですが、今回の舞台は時代劇をミュージカル風にアレンジして殺陣あり歌ありダンスありのまさにエンターテイメント！！自分自身もミュージカルに出演するのは約 5 年振り。普段のライブと違うところは歌うにしても踊るにしても、そこに役に存在してシチュエーションが存在して人間関係が存在しているところ。芝居の延長線上に歌があるので、歌い方や伝え方を微妙に変えていく事で舞台の上での

存在の仕方が大きく変わってきます！！ライブ中に生まれるメンバーとの呼吸もそうだけど、稽古を繰り返す事で生まれる共演者との呼吸の合い方だったり、感情と動きと歌がリアルに同調するのが本当に楽しい。まさに音楽とお芝居の結合ですね！！これだから芝居はやめられません（笑）・・・」

上記の一文から一人のエンタテイナーの中で音楽と舞台芸術をクロスオーバーさせることで、新たな表現力を模索しようとする意識が生まれつつあるのを読みとることが出来る。

(2) 若手俳優のみで編成されたバンドーココア男。

そして、まるで +Plus の後を追うかのようにデビューしたのがココア男。で、こちらは細貝圭、鈴木勝吾、鎌苅健太、井出卓也、米原幸佑のメンバー全員が俳優である。公式 HP (<http://www.avexnet.or.jp/cocoaotoko/index.html>) に記載されている彼らのプロフィールから要点を拾って引用すると次のようになる。

「関西テレビの人気番組『イケメンデルの法則～恋に苦しむハンサムなエンドウ豆たち』(2010/3/25 放送終了) からスピニアウトした人気俳優5人から成るロックバンド。“究極のモテ男を目指す”という番組コンセプトのもと、『ココア』こそモテ男のマストアイテムであり、それこそが真の『男』である！という結論に達し「ココア男」と命名。2010年4月15日1stシングル「甘い罠 苦い嘘、、、」でデビューを果たした。「普段は、舞台にドラマにバラエティにと個々に活躍する彼らだが、『ココア男。』ではそんな5人が大集結。ロックバンドとして、普段とはひと味違った顔でファンを魅了!!」「今年4月デビュー以来1stSG、2ndSGとオリコンデイリートップ10を果たした彼等の、待望のMINI ALがいよいよ12/1発売。」

このように彼らは番組からのスピニアウト、すなわち二次創作、副産物として関西でデビューし、所属事務所は異なるが、全員がテレビ、演劇、映画から芸能活動をスタートし、米原幸佑は以前から別に演劇ユニットRUN&GUN (HP → <http://www.runandgun.jp/>) のメンバーとして活動しており、メンバーのプロフィールについて公式HPに掲載されている情報を整理すると次のようになる。

音楽創作については鎌苅健太が〈Rebirth〉の作詞をしているくらいで、+Plus と異なりメンバーは今のところほとんど関与していないようだが、音楽

	細貝 豊	鈴木 勝吾	鎌苅 健太	井出 卓也	米原 幸佑
	ほそが い けい	すずき しょうご	かまかり けんた	いで たくや	よねはらこうすけ
生年月日	1984年10月10日	1989年2月4日	1984年2月17日	1991年3月12日	1986年3月13日
出身地	東京	神奈川	大阪	東京	大阪
オフィシャル ブログ	Living my Dream...	Smiling days	鎌苅健太☆blog	汗だく、つゆだ く、いでたくで す!	RUN&GUN米原幸 佑で×いず
主な出演作 TV	MBS『執事喫茶 にお帰りなさい ませ』	EX『侍戦隊シンケン ジャー』（シンケン グリーン・谷千明 役）、EX『仮面ライ ダー・ディケイ ド』、EX『同窓会~ ラブ・アゲイン』浩 太役	CX『ザ・ベストハ ウス123』、NHK 大阪『あほやねん! すきやねん!』	NTV『ホテルノ ヒカリ2』、TX 『きらりん☆レ ボリューション』、TX『おほ スタ』、NHK 『天才てれびく んMAX』	NHK『みんなのう た“ありがとう!グ ラスホッ パー”』、NHK大 阪『あほやねん! すきやねん!』
映画	『華鬼』『僕ら はあの空の下 で』『紅色の硝 子』『Girl's Life』	『侍戦隊シンケン ジャーVSゴーオン ジャー銀幕版 BANG!』、『侍戦隊 シンケンジャー銀幕 版天下分け目の戦 い』、 『BADBOYS』 桐木 司役にて出演	『苦い密~消えたレ コード~』、『アメ イジング グレイ ス』	『NECK』	『ヒーロー・ ショー』、『湾岸 ミッドナイト THE MOVIE』
舞台 ミュージカル	『アニメの王子 様』、『女信 長』、『パタフ ライ・エフェク ト』、『戦国 BASARA』、 『ダンプリン』	『源氏物語xsongs大 黒真季~ボクは十二 単衣に恋をする』	ミュージカル『エ ア・ギア』（主 演）、『abc★赤 坂ボーイズキャバ レー』		『エア・ギア』、 RUN&GUN Stage 『僕等のチカラで 世界があと何回救 えたか』 ※RUN&GUNの一 員として、その他 多数のTV、映画、 舞台に出演。
Web				goomo『キラキ ラ男子学園』	

雑誌『AREANA37℃ SPECIAL』のインタビュー記事では、今後は作曲もとい
う意欲を示している。まだ演奏レパートリーが少ない（下記のライブで演奏曲
目がすべて出尽くしていると思われる）にもかかわらず、2010年12月6日、
Shibuya O-EASTでライブを敢行し、その盛況ぶりは上記の雑誌のライブリポ
ートから伺えるが、J-Popの世界でどのような位置を占めていくか、今後の活動
が注目される。

ライブの演奏曲目

- 1.Rebirth 2.Let me free ~ 強引なほど、、、 3. 甘い罠 苦い嘘、、、 4. ヒリヒリしようよ、、、
 5. 君がいたから 6. さよなら 7.as long as you love me 8. もらい泣き
 9. 悪サンタが町にやってくる 10. キューティハニー 11. ジングルココア 12.Do it!!!
- Encore 1.CROSS MIND DOBLE Encore 2.Rebirth

(3) 俳優のライブ活動（インディーズ）の一例

上記のような若手俳優たちの音楽メジャーデビューの例からも容易に想像されるように、その音楽活動はインディーズ組からメジャーデビュー組まで、ソロまたは2人組ユニットから4人以上のバンドを組む例など様々で、全体としてその底辺、裾野の広さが感じられる。そうした意味で最近の活動から筆者が直接見聞した興味深い一例に2010年12月27日17:00より渋谷のライブハウス DESEO で行われた「音の缶詰ーおとかんー」がある。その出演者は TH・IA（ティア）、郷本直也、吉岡毅志、高野八誠、Ash、司会は植田圭輔で全員が舞台を中心に活躍する若手俳優、声優たちである。会場で配布されたチラシには「普段は俳優・声優・という顔を持つ彼らの「音楽」「パフォーマンス」イベント！歌あり、トークありの3時間！ 2010年を総決算！！」と書かれている。

トップバッターを務めた TH・IA は Web ラジオ⁵の番組「素顔の少年」から生まれた紅葉美緒、藤原祐規、豊永利行、飯田利信によるユニットで、オープニングは歌ではなく、メンバーによるオリジナル脚本「本番前の僕ら」のリーディングを披露した。その後、豊永俊行自作自演のソロや全員による〈素顔のモノローグ〉（作詞、作曲不明）などが歌われ、ロックミュージカル「ブリーチ」にも主演している郷本直也、ウルトラマンを演じた吉岡毅志、高野八誠のユニットがそれぞれ自作作曲をアコースティックギターの伴奏（郷本はゲストギタープレイヤーによる伴奏、吉岡・高野ユニットは弾き語り）で演奏した。そして、トリを務めた ASH とは俳優の中村誠治郎と根本正勝のユニットで、音楽活動歴も他のユニットよりも長いこともあり、本格的なバンド編成で熱気を帯びたパフォーマンスを展開した。

2 J-Pop 界からミュージカル、映画、テレビへの参入

次に J-Pop 界からミュージカル、映画、そしてテレビドラマへ参入している若手ミュージシャンとして松下優也の活動を見ていこう。松下は公式 HP (<http://www.matsushitayuya.com/>) によると、1990年5月24生まれで兵庫県出身。プロフィールが as A SINGER as AN ACTOR と二分されて記述されているのは比較的珍しいことで、そこにすでにエンタテイナーとしての基本的スタンスが明確に示されているといえるだろう。舞台、映画への進出はそれぞれ「音楽舞台会黒執事」、「ヒカリ、その先へ」、そして2011年年明けのTV新番

組では主演を務めている。中でも上記の映画「ヒカリ、その先へ」のプロモーションに見る音楽と映像の関係が興味深い。そのプログラムの p.1 と p.12 にはそれぞれ次のような記事がある。

「この物語は、8/25 リリースの両 A 面シングル「Bird/4Seasons」に収録されている「4Seasons」の世界を膨らませてでき上がった。「夢を追いかける人たちと共に、勇気や希望を分かち合える作品」と松下が語るように、挫折や葛藤を抱えながらも夢を追いつける二人の若者が起こす奇跡を描いた感動作だ。

また、『ヒカリ、その先へ』は、劇場公開に先駆けて8/11よりケータイ音楽ドラマ「DOR@MO (ドラモ)」として、期間限定、無料で先行配信中。ただし、ケータイの先行配信ではストーリーは完結せず、劇場版でエンディングを迎える。この斬新な公開方式は、これからのケータイ動画や、映画の在り方として業界の注目を集めている。」(アンダーラインは本稿の筆者による)

そして、ケータイ音楽ドラマについては、「人気アーティストの楽曲をドラマ化し、モバイルやPCに配信する他劇場上映なども行う、ソニー・ミュージック・エンタテインメントの企画・製作による映像プロジェクト。2008年12月にスタートし現在までに、加藤ミリヤ、JUJU、清水翔太、ゴスペラーズ、スキマスイッチなど活躍中のアーティストの楽曲から生まれた9作品を制作・配信し、累計350万ダウンロードを記録。これらは配信のほかにDVDパッケージ化、新宿バルト9、梅田ブルクでのスクリーン上映など多方面に展開。」とある。

初主演のTV番組(TBS系「カルテット」<http://www.mbs.jp/quartet/>)では主題歌「Paradise」(エピックレコード)も歌っており、音楽雑誌『AREANA37℃ SPECIAL』のインタビュー記事では「ライブはただ曲を並べるだけではなく、ダンスも含んだ物語を作りたいと思っているので、それを表現する事も楽しかったです。」と述べているところを見ると、音楽表現にもストーリー性を盛り込もうとする意識が感じられ、そうした経験を音楽だけでなく映画やミュージカルにどのように応用していくか、松下優也個人における音楽と映画、ミュージカルの関係性は今後どのような展開を見せるか注目に値する。

また、J-Pop界のミュージシャンで演劇映画界でも活動している先例の一人に貴水博之がいる。ミュージシャンとしては1992年、浅倉大介とaccessを結成し、シングル「VIRGIN EMOTION」でデビュー以来、その活躍ぶりはJ-Popの輝かしい一頁を飾っている(音楽活動の詳細は公式HPから知ることができ

る)が、彼が俳優として主演を務めた公演の中から、内容的にクロスオーバー現象が感じられる近年の好例としてダンスミュージカル「クラリモンド」⁶が挙げられる。その公演プログラムに掲載されている「歌が僕を進化させ続ける」と題した一文にはミュージシャンであり俳優でもあるという意義が語られているので次に引用する。

「(前略)それから13年。浅倉さんとのユニット「access」の音楽活動で、僕たちは、古いものを大事にしつつ、新しい領域をどんどん開拓していこうとしています。「今回は何ができるだろう」という期待が尽きることがないんですね。このミュージカルとの出逢いだって、僕には新たな世界を拓く大きな機会を大きな機会だと思っています。これまでずっとポップスの世界でやってきた僕には、楽曲ってある意味、流れていったほうがいいという考え方がありました。全部が全部、重くのしかかるよりは、心地よく流れていくほうがいい。文字通り、“流行歌”です。けれどもミュージカルの楽曲は、歌ではあるけれどもセリフの延長だという意識がある。だから、ひとつひとつの音符をしっかりとかみしめながら歌っていかなきゃならない。僕には、そういう歌い方はひとつの挑戦です。もちろん今まで培ったものをミュージカルという場で、いい形で表現できたらとも思っています。そうして貴水博之として、表現の幅を広げてゆきたい。いつまでも進化し続けるシンガーでありたいと思っています。」

ここにも複合的エンタテイナーを志向する姿勢が看取されるが、実際、その他2人以上のユニットで類似の指向性を示す人々を想起するのはそれほど難しいことではない。例えば、2人組ユニットのHONEY L DAYSの東山光明、音楽と演劇グループを区別し明示しているEXILE華組、同風組、男女混合によるユニットAAA、4人のダンスヴォーカルユニットのLEAD(全員がヴォーカル、ラップ、ダンスを担当)などが音楽と映画、演劇の間を自由に行き来しており、これらの例を見ると総じて「表現者とは何か？」という問題意識が自然に浮かび上がってくるだろう。

3 創作ミュージカルの盛況と演劇界における音楽・ダンス重視演目の顕在化

では何故、俳優たちはJ-Popに、そしてミュージシャンたちは舞台・映画にデビューするのだろうか？ 単純に考えれば、直接のきっかけは所属事務所によるビジネス戦略ということになるだろうが、そうした戦略が考え出され、実際上

記のような複合的エンタテイナーともいべき人々が活躍している背景には、和製オリジナルミュージカルの盛況と音楽・ダンスを重視する演目の増加が1つの素地としてあるように思われる。それらには既製曲の使用から書き下ろしまで、J-Pop との様々な関係が看取され、過去の演劇人にとってはストレートプレイが基本であり、そこにおいて俳優は歌舞に関わらないというのが演じる側および見る側の共通認識だったことを思うと非常に興味深い。この問題の追究、解明は他日に期して、今回はその一端を示すに止め、以下、「日本オリジナルミュージカル新作ラッシュ」（『華麗なるミュージカルの世界』キネマ旬報社、2010年）や「日本のミュージカル今昔物語」（『華麗なるミュージカルガイド』キネマ旬報社、2007年）などを参考に、和製ミュージカル、音楽劇、音楽・ダンス重視劇という3タイプに分けて論じる。

(1) 和製ミュージカルー J-Pop と何らかの関連が認められるものを中心に

a. オリジナル楽曲で構成するもの

使用する音楽スタイルからロックミュージカルという看板を掲げた演目が多いが、中でも多くがコミックやアニメを原作とすることから日本が誇る最強コンテンツとして「アニメミュージカル」という呼称を用いて1つのジャンルとして認識する見方も出てきている。『レプリーク』には「現在のダントツ人気のアニメミュージカルは『テニスの王子様』で、「週刊少年ジャンプ」（集英社刊）に連載されていた人気漫画の原作をアニメミュージカル演出の第一人者、三ツ矢雄二の脚本（2007年9月まで）・作詞（歌詞作詞も手がける）でシリーズ化したもの」とあり、ミュージカル「テニスの王子様」の公式HPの記載を参照、要約すると次のようになる。

漫画「テニスの王子様」（通称「テニプリ」）を舞台化した作品で、正式名称はミュージカル『テニスの王子様』、通称「テニミュ」と呼ばれる。2010年8月より2ndシーズンが始動。2011年1月の「ミュージカル『テニスの王子様』青学 vs 不動峰」上演を皮切りに、全国大会の決勝戦までを新たな演出で展開していく。舞台化不可能と思われたテニスの試合を、ピンスポット照明と打球音の融合、時には巧みな映像を用いて表現。完成度の高い斬新な振付、台詞を元に作られたシンプルで心に刺さる歌詞、キャッチーでつい口ずさみたくなるような楽曲。それぞれが絶妙に組合わさることによって、登場人物の心情や試合中のドラマを舞台上に再現させた。（中略）1stシーズンの初演は2003

年春に上演。そこから年2回（夏・冬）公演が行われ、春には公演楽曲を使用したコンサート Dream Live（通称「ドリライ」）が開催された。主役校である青学（せいがく）の代替わりによってタスキを繋いでいく伝統が生まれ、5代目が主演をつとめる2009年12月～2010年3月の「The Final Match 立海 Second feat. The Rivals」で、原作最終話である全国大会決勝戦までを舞台化、2010年5月「コンサート Dream Live 7th」をもって1stシーズンが終了。7年間で本公演15タイトル、ドリライ7タイトルの計22タイトル、690公演を行い、出演キャスト数は約150名、累計動員数は100万人を超え、多くの方に愛される作品へと成長している。

その音楽の作曲者は佐橋俊彦で、HP (http://www.face-music.co.jp/2_artist/sahashi.htm) の経歴を要約、引用すると「1986年東京芸術大学音楽学部作曲科卒業。1988年、CBS ソニー主催「ニューアーティスト・オーディション1988」で、最優秀アーティスト賞、及びクリスティンリード賞受賞。東京ディズニーランド5周年目よりパーク内におけるショー（キャッスルショー、スターライトファンタジーなど）の音楽を担当。94年アジア大会オープニングイベント音楽担当。NHK 紅白歌合戦のオープニング曲を91年から94年まで4年連続で作曲し、99年郵政省簡易保険局・NHK 制定の「みんなの体操」を作曲する。現在では「映画」・「テレビドラマ」・「アニメ」等の音楽を担当し、クラシックからロックまで、幅広い作曲家として活躍中。」となる。

ちなみにテニミュの2005年のDVDでは第1幕：〈ラン・ラン・ラン〉〈俺に指図するな！〉〈勝利の神はどちらに微笑む？〉〈俺は俺の名前で呼ばれたい〉〈オレは上に行くよ〉〈パワーアップで行こう！〉〈攻めろ、強くなれ！〉第2幕：〈いよいよ決勝、都大会〉〈行くぜ！〉〈俺たち地味1S〉〈グッド・コンビネーション〉〈勇気VS意地〉〈輝け、もっと〉〈ラン・ラン・ラン（リプライズ）〉といった楽曲がラインアップされており、前述のようにそれらによるライブも行われている。そして、これと同様の手法によりロックミュージカル「ブリーチ」もライブを行っているのは共通現象として興味深い。

b. 既製の楽曲で構成するもの

近年の例をいくつか挙げれば、芸能事務所ワタナベエンターテインメントの所属タレントを動員した「ザ・ヒットパレード ショウと私を愛した夫」（2007年10月）、歌謡曲とJ-Popの初期の楽曲を活用した「歌謡シアターラ

ムネ～木綿のハンカチーフ編～」(2008年3月)、「歌謡シアターラムネ～夢の途中編～」(2008年11月)、尾崎豊の楽曲で構成された「MISSING BOYS 僕が僕であるために」(2009年4-5月)などがあり、直近ではロックバンドX-JAPANのHIDEの楽曲で作られた「ピンクスパイダー」の上演も予定されている(2011年3月8日～27日、於東京グローブ座)。

(2) 音楽劇

上記とはやや傾向が異なり、本格的ミュージカルという形を取ってはいないが、これも音楽が演劇と深く関わっている好例であることは確かで、演劇における音楽の使用法、表現の可能性を知ることができる。その注目すべき一例として「特別法第001条 DUST」(米原幸佑出演)がある。原作は『特別法第001条 DUST』(山田悠介著/文芸社刊)で、脚本・演出：岡本貴也、デジタルハリウッド・エンタテインメントプロデュースにより2009年1月14～27日、新国立劇場小劇場にて公演が行われた。音楽監督・生演奏を暮部拓哉が担当している。以下、概要を引用する。

「日本国はニートと呼ばれる若者たちを棄てた。働いていない理由それだけで。無人島に棄てられた若者6人には彼らなりの理由があった。でも国にとっては理由なんてどうでもいい、彼らは社会不適合者で、社会のクズだ。船で運ばれてくる大量のクズを漁り、わずかなレアメタルを採る、報酬は紙くずみたいな味のパンひとつ。ほんの少し道を間違えただけ、タイミングを掴み損ねただけなのに、二度と許してはもらえなかった。社会のゴミとして棄てられた彼らは、無人島で生き残ることはできるのだろうか・・・。「原作：山田悠介×脚本・演出：岡本貴也」コンビの舞台化第2弾。アコースティックギター1本で繋ぐ音楽劇。痛烈なメッセージを歌にのせて贈る衝撃の舞台。」

暮部拓哉による音楽はCD化もされており、同類の演目における音楽の役割の重さが伺い知れる。

(3) 音楽・ダンス重視劇

近年、ミュージカル、音楽といった冠は施されてはいないが、劇中に音楽やダンスが用いられ、実質的に重要な役割を果たしている演目をよく目にする。例えば、STCによって上演(2010年12月8日～15日、於品川六行会ホール)

された美童浪漫大活劇「八犬伝」のプログラム冊子の冒頭のコメント（STC 事務局代表の天美幸による）にもそれがよく表われている。「(前略)メディアミックス的に開始した本作品も、第二弾を迎えました。タイトルこそ、ミュージカルの文字は入れておりませんが、毎度の事ながら本作品も歌、ダンス、殺陣満載のエンターテイメント作品に仕上がっていると思います。(以下略)」(アンダーラインは本稿の筆者による)とあり、そうした状況を鑑み本稿では「音楽・ダンス重視劇」と呼んでいる。

実際、同じようなスタイルの演目として注目されるものに芸能事務所ケイダッシュステージの企画・制作による「メモリーズ」がある。主題歌をはじめ劇中の音楽は BARABAN、奥村健介（ブログは <http://ameblo.jp/ken-ske/>）、楠瀬拓哉ほかが担当しており、本演目は実質的にシリーズ化されており、下記のエンディング曲が歌い継がれている。

〈For the memories〉（作詞：妹尾匡夫、作曲：奥村健介）

君が確かに信じていること 僕はきっと信じられる
君が密かに愛している人 僕はガツンと愛して見せる
わかりあうと言うコト 通じているというコト
それがオレたちの誇りだから 迷うことなく そばにいるのさ
Do the working for the memories. (3回繰り返し)
人がゴキゲンに生きていくこと 人がゴキゲンに死んでいくこと
覚えておきたい大切なコト 見つけていきたいハッピーストーリー
誰かのためにイマ 走り続ける時間こそ
それを与えられる力だから 疑いもなく 進み続ける
Do the working for the memories. (3回繰り返し) What a wonderful life.

〈Memory's of my heart〉（作詞：妹尾匡夫、作曲：BARABAN）

君は今 愛してるかい 君は今 信じてるかい 君は今 愛されてるかい
日々急ぎ 答えを求めれば それはたちまちと 逃げていく
わが武器は じたばたず おどろかず たじろがずな メモリーズ
軽快ないでたちで 作ってみる思い出 大事な今つむいで 遙かなる日々をつかんで
だけど君にもわかってほしい たった今、一人ではないのだと
僕に出来ることは 君の心の 隙間にある 生きている証
たとえ誰も見えなくても 君とボクたちは 走り出す

そして、後者は「メモリーズ4」においては〈一人ではないから〉と改題され、歌詞も増幅されている。また、キャストには東山義久と森新吾といったダンサーが登用されており、森新吾はシリーズ一作目より振付も担当しており、彼らの所属するDIAMOND☆DOGSというダンスグループは2011年4月13日発売のシングルCD〈カルナバル〜禁じられた愛〜〉でメジャーデビューが予定されていて、ここにも俳優・ダンサーの音楽業界進出、複合的エンタテイナー志向が見える。

4 舞台・コンサート（ライブ）の映像化、上演（上映）方式の新しい動き〜ゲキシネと映像ライブ

上記のような演目はテレビで放映されることはほとんどないがDVDを購入すれば見る事ができるし、一部はYOUTUBEでも視聴可能である。そうすると、テレビに登場するものをメインカルチャーとし、それ以外をサブカルチャー、カウンターカルチャーと一括りにして一蹴することはもはや実質的に意味をなさなくなっていることが推測される。

そうした和製オリジナルミュージカルや音楽重視の演目の秀作を数多く世に送り出している団体の1つに劇団☆新感線があり、彼らは演劇公演の概念を拡大した上映方式を推し進めている点でも注目に値する。代表演目の1つロックミュージカル「SHIROH」は帝国劇場において、約30年ぶりに上演されたオリジナルミュージカルである。それまで音楽を多用した作品を数多く世に送り出してきた劇団☆新感線だが、本格的ミュージカルへの挑戦は同作が初めてで、天草四郎と島原の乱の史実をモチーフにした3時間15分の大作で今でも高い評価を得ている。

劇団☆新感線の音楽担当として1992年より関わっているのが、座付き作曲家ともいべき岡崎司で、音楽を中心とする演目の上演の際には、ギタリストとしてもステージを支えている。同劇団では、「メタルマクベス」「五右衛門ロック」のように全編にわたりバンドによる生演奏が行われることが多く、そうした音楽を中心とした作品を「音もの」と称している。

また、上演方式で注目に値するのが2003年秋からスタートした「ゲキ×シネ」プロジェクトである。これは映画館のスクリーンで演劇の映像を見るもので、多くのカメラを使った多様なアングル、顔のアップなどの映像表現が用いられ、生の舞台を撮影した映像に、色・明るさを調整する、視覚効果を重ねる

など大スクリーンで楽しむためのさまざまな工夫が凝らされるため、これもクロスオーバー現象の1つ、あるいは新しい1つのエンターテインメントとして捉えることができるだろう (<http://www.geki-cine.jp/>)。そして、これに対抗するかのよう、J-Pop 業界初と言われる TUBE のライブが 3D 映像で上映された (2010 年 12 月、新宿バルト 9) ことは今後、J-Pop 業界から映像分野への攻勢も十分に考えられるだろう。

そして、上映方式のもう 1 つの新しい波として注目されるものに Web ラジオがある。その詳細については上野俊哉、毛利嘉孝『実践カルチュラル・スタディーズ』(pp.228-229) に譲るが、簡単にいえば、ウェブとラジオをつなげて音声で番組を配信するインターネットのコンテンツの一形態で、ラジオと称してはいるが、電波ではなくインターネット上にて配信されるため、パソコン等を利用し聴取する。その類の実践例の 1 つとして筆者が体験したものにジョリーロジャー主催の音楽イベントとして +Plus ほかが出演した「音楽王 2010」(2010 年 12 月 23 日、於六本木 Morph tokyo) があり、これは U-Stream を通じて実況生中継されている。U-Stream はインターネット接続とカメラがあれば、誰でも世界中に放送することが出来るというシステムだが、そして、それを映画館に応用したのが、「テニミュ大千秋楽ライブビューイング」である。文字通り、2010 年 2 月 11 日 (金) 17:00 より上演された東京凱旋公演の様相を会場の日本青年館大ホールから下記の全国映画館で実況生中継した画期的なイベントで、その実施映画館は下記の通りである。

【北海道】札幌シネマフロンティア

【宮城】ワーナー・マイカル・シネマズ名取エアリ

【東京】新宿バルト 9、T・ジョイ大泉、TOHO シネマズ六本木ヒルズ

【神奈川】横浜ブルク 13、TOHO シネマズららぽーと横浜、TOHO シネマズ川崎

【千葉】T・ジョイ蘇我

【埼玉】シネプレックスわかば

【茨城】シネプレックスつくば

【新潟】T・ジョイ新潟万代、T・ジョイ長岡

【石川】ワーナー・マイカル・シネマズ御経塚

【静岡】TOHO シネマズ浜松

【愛知】109 シネマズ名古屋、TOHO シネマズ名古屋ベイシティ、ワーナー・マイカル・シネマズ大高

【三重】 109 シネマズ四日市

【大阪】 梅田ブルク 7、ワーナー・マイカル・シネマズ茨木

【兵庫】 TOHO シネマズ西宮 OS

【京都】 T・ジョイ京都

【広島】 広島バルト 11、T・ジョイ東広島

【島根】 T・ジョイ出雲

【福岡】 T・ジョイリバーウォーク北九州、T・ジョイ久留米、福岡中州大洋映画劇場

【大分】 T・ジョイパークプレイス大分

【鹿児島】 ミツテ 10

5 まとめ

上記のような新しい動向は、演劇 DVD の制作発行の普及と相まって、文化状況における地方格差の解消が期待され、実際、ココア男。は関西から人気の火がついた好例で、それはテレビ地上波ゴールデン時間枠の視聴率神話の崩壊に繋がる可能性をも秘めていると考えられる。そして、本稿で言及した様々なクロスオーバーの事例は商業戦略としての側面が顕著に見受けられると同時に、音楽に積極的にアプローチを試みたい演劇界・映画界、舞台・映像を活用したい音楽界、といった芸能ジャンル間の新しい関係性の構築へ向けて当初からボーダレスなスタンスで活動に邁進している才能豊かな若きエンタテイナーたちの姿が見える。それらは、さらに大きく言えばテレビゴールデン時間枠の番組に頻繁に登場するタレントを多く抱える大手芸能事務所を中心とするエンタテイメント業界の旧秩序、旧来の枠組みへの挑戦であり、テレビ（特にゴールデン）中心の考え方、捉え方の終焉、メジャーマイナーの区分けの実質的無意味化を促進する可能性を秘めているように思われる。また、エンタテイナー個人としては「プロとは何か」、プロフェッショナリズムの在り方が問われていることでもある。ユニットとしてはもちろん、ほとんどが個人のオフィシャルブログを持っているのは、ファン獲得の有効な手段であるだけでなく、それぞれに個性を主張しているということでもある。換言すれば、「音響機械人形化」したようなミュージシャンへの反動、あるいはテレビ、映画中心の過去のエンタテイナーとは明確に一線を画し、あくまでも演劇、音楽ともにライブが基本という姿勢がそこには見えるように思う。多少穿った見方をすれば、キチッとしたライブができない J-pop ミュージシャンへの挑戦ではないか？ そして、

歌やダンスのプロがミュージカルや演劇に進出するという事は、歌、ダンス、演技が中途半端なレベルのアイドルやアイドルとしてスタートしたテレビタレントなどは淘汰されてしまう可能性も考えられるだろう。そして、それをさらに明らかにするためには、本稿で取り上げたエンタテイナーたちの音楽的力量をどう評価するかという問題に今後、焦点を当てて行きたいと考える。

いずれにしても、市場の競争原理が支配するエンタテインメント業界において、本稿で取り上げた若い個々のエンタテイナーはプロとしての自覚を持ち、確固たるマネジメントの仕組みの中で、自らが関わるジャンルが日本文化の創造、発展にいかに関与していくかという意識のもと、活動を展開している姿が見え、各自表現者とは何かという問題意識を常に持ち続けていることが伺える。表現者としての自覚、すなわち、何を学び、自らの演奏や創作活動を文化という枠組みの中で如何に位置づけるか、実はこれはクラシック音楽のプロを目指す若者も銘記すべき問題で、そういう意識を養成できない教育機関は淘汰されるだろう。

[注]

¹ 「ココア男。」というように「。」が付くのが正しい表記

² 2009年公開、ジョリーロジャー配給

³ +Plusのメンバーの一人、小谷嘉一が出演している

⁴ 3曲目に収録されている〈Sun-Day!!〉はTBS系テレビ「マルさまぁーず」2010年4・5月度エンディングテーマ

⁵ Webラジオについては後述する

⁶ 「クラリモンド」とはフランスの詩人・小説家テオフィルゴーティの原作をもとにしたダンスミュージカル

【参考文献】（発行年順）

上野俊哉、毛利嘉孝『実践カルチュラル・スタディーズ』ちくま新書345、筑摩書房、2002年

鳥賀陽弘道『Jポップとは何か—巨大化する音楽産業—』岩波新書945、岩波書店、2005年

久保田慶一『音楽とキャリア』スタイルノート、2008年

『ダンスミュージカルクラリモンド公演プログラム』2006年

『華麗なるミュージカル・ガイド』キネマ旬報社、2007年

『レプリーク Bis vol.12』阪急コミュニケーションズ、2008年9月

『レプリーク Bis vol.13』 阪急コミュニケーションズ、2008年12月
『華麗なるミュージカルの世界』 キネマ旬報社、2010年
『AERAMOOK 劇団☆新感線 30年サムライたちの軌跡 1980-2010』 朝日新聞社、2010年
『映画ヒカリ、その先へプログラム』 株式会社ソニー・ミュージック・エンタテインメント、
2010年10月23日
『美童浪漫大活劇八犬伝第二部公演プログラム』 2010年12月
『ARENA37℃ SPECIAL2011 02 vol.77』 (株) 音楽専科社、2011年

【参考音源・映像】(発行年順)

『ミュージカルテニスの王子様 IN WINTER 2004-2005 ミSIDE- 山吹 feat. 聖ルドルフ学院』
MJBD-70256、マーベラスエンターテインメント、2005年
『メモリーズ4』 COBM-5636、コロムビアミュージックエンタテインメント、2009年
『+Plus Answer/You』 XQFM-1011, JOLLY ROGER, 2009年
『キャンバス』(初回限定盤: CD + DVD) PCCA-03159、PONY CANYON, 2010年
『メンズ校』 JRRC1017, JOLLY ROGER, 2010年
『ココア男。甘い罫苦い嘘、、、』 AVCD-31819/B, 2010年
『CROSS MIND/Let me free~ 強引なほど、、、』 AVCD-31910/B, 2010年
『DUST 特別法第001条』 COBM-5624, コロムビアミュージックエンタテインメント、* 出版年
不明